

# フィヒテの教育論(Ⅰ)―『ドイツ国民に告ぐ』

小澤 幸夫

## 要旨

ナポレオン支配下のベルリンでフィヒテが1807年12月から1808年3月にかけて行った連続講演『ドイツ国民に告ぐ』は、高校の世界史の教科書などにもしばしば登場する。このため、ともすれば政治的な文章と思われがちだが、実際に読んでみるとそのほとんどが教育に関する内容であり、相前後して書かれた彼の大学論『学術アカデミーとの適切な連携をもったベルリンに創設予定の高等教育施設の演繹的計画』と表裏一体となって、フィヒテの教育論の重要な部分を形作っている。これはフィヒテがドイツの再生は「新しい教育」の導入なくしては不可能であると考えていたことによる。本稿では、時代背景はもとより、『全知識学の基礎』や『現代の根本特徴』といった彼の他の著作、さらにペスタロッチの教育論などとの関係に留意しつつ、主として国民教育論として『ドイツ国民に告ぐ』を読み解いた。

## はじめに

今年(2010年)は近代大学の模範とされたベルリン大学開学200周年にあたる。筆者は先にベルリン大学の基本理念に影響を与えたカントの大学論について述べたが<sup>1</sup>、今回はベルリン大学設立に直接関与したフィヒテの大学論ならびにそれと密接に関連する『ドイツ国民に告ぐ』について考察したい。紙幅の関係で、本稿では『ドイツ国民に告ぐ』を中心に扱う。

## 1. 二つの教育論が書かれた歴史的背景

1806年ナポレオンによりライン同盟が結成され、神聖ローマ帝国は崩壊した。10月14日にはナポレオン軍はイエナとアウアーシュテットの戦いでプロイセン軍を破り、首都ベルリンに迫っ

てきた。フィヒテは妻子をベルリンに残し、プロイセン政府の移ったケーニヒスベルクに避難した。ナポレオン支配下のベルリンに留まるのを嫌ったためである。フィヒテは翌年6月まで、以前カントも教えていたケーニヒスベルク大学で講義をしていたが、ここにもフランス軍が進行すると聞くと、コペンハーゲンに逃れる。しかし8月にはナポレオン軍が駐留するベルリンにまた戻る。

翌9月にプロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム3世の枢密顧問官であったカール・フリードリヒ・バイメの要請を受け一ヶ月ほどで書かれたものが、フィヒテの大学論『学術アカデミーとの適切な連携をもったベルリンに創設予定の高等教育施設の演繹的計画』(Deducirter Plan einer zu Berlin zu errichtenden höheren Lehranstalt, die in gehöriger Verbindung mit

<sup>1</sup> 小澤幸夫「カントの大学論―『学部之争い』」神奈川大学経営学部『国際経営論集』第35号、63～71頁。

einer Akademie der Wissenschaften stehe)<sup>2</sup>である。

この大学論を書き上げた直後、彼は12月13日から翌年3月20日まで毎日曜日にベルリンの学術アカデミーで14回にわたって連続講演を行った。これが『ドイツ国民に告ぐ』(Reden an die deutsche Nation)である。この講演の最中の1808年1月2日、彼はバイメに宛て次のような手紙を送っているが、そこにはフィヒテの切羽詰ったような気持ちが表れている。

ドイツ人の考え方を改革し、形成するためには、一刻の猶予もありません。この講演は一つ一つが行われたら即座に印刷され、広く読まれるようにしたいと思います。(中略)私は危険を冒すということを十分承知しています。パルムと同じように一発の弾丸が私を殺す可能性があることも承知しています。けれどもこのようなことは私の恐れるところではありません。私の抱く目的のためには喜んで死をも辞さないつもりです。<sup>3</sup>

この手紙に登場するパルムとはニュルンベルクの書店の経営者で、1806年に匿名で書かれたパンフレット『屈辱のドイツ』を出版した。その内容はナポレオンとその軍隊を攻撃したものであったのだが、著者の名を明かさなかったのがナポレオンの命によって銃殺されたのであ

る。<sup>4</sup> このようにこの講演はまさに生命を賭しての行動だったのである。

さて、彼がそこまでして行った『ドイツ国民に告ぐ』とはいったいどのようなものであったのだろう。世界史の教科書にも登場するこの講演は政治的な文章と思われがちだが<sup>5</sup>、実際に読むと、そのほとんどが教育論であり、同じ時期に前後して書かれた彼の大学論を理解する上で不可欠の資料であることが分かる。書かれた順序とは逆になるが、後者を理解するには前者の理解が必要と思われるので、まずこれから考察する<sup>6</sup>。

## 2. ドイツ国民に告ぐ

14回の講演には次のようなタイトルがつけられている。

1. 緒論と全体の概観
2. 新しい教育一般の本質について
3. 新しい教育に関する説明の続き
4. ドイツ人とその他のゲルマン民族との主な相違
5. 前述の相違による結果
6. 歴史におけるドイツ的特性の解明
7. ドイツ民族の根源性と気質のさらに深い理解
8. 本当の意味での民族とは何か、祖国愛とは何か

<sup>2</sup> バイメからフィヒテに宛てた1807年9月5日付の書簡にこの件に言及している箇所が見られる。J. G. Fichte: Gesamtausgabe der Bayerischen Akademie der Wissenschaften. Hrsg. von Reinhard Lauth, Erich Fuchs und Hans Gliwitzky (以下GAと略記), III, 6, Stuttgart-Bad Cannstatt: Friedrich Frommann 1997, S.173.

なおフィヒテの大学論の訳者である教育学者、梅根悟は「解説」の中でバイメから要請を受けた日付を11月5日としているが、その根拠は示していない。バイメからフィヒテに宛てた1807年11月5日付の書簡というのは上記の全集にもHans Schulzが編集した書簡集にも収録されていない。フィヒテ他『大学の理念と構想』梅根悟訳、明治図書、1970年(以下梅根と略記)、246頁参照。

<sup>3</sup> GA, III, 6, S.213.

<sup>4</sup> 上記書簡の註ならびに福吉勝男『フィヒテ』清水書院、<sup>2</sup>1998(以下福吉と略記)、78頁以下参照。

<sup>5</sup> フィヒテの子息Immanuel Hermann Fichteがジャンル別に編集した全集ではこの講演は「政治、道徳、歴史哲学」の巻に収められており、哲書房から刊行中の邦訳の全集でも「政治論集」とともに1巻をなす予定である。

<sup>6</sup> この問題を日本で最初に喚起したのは前述の梅根であると思われる(梅根、253頁以下参照)。その後の研究は多かれ少なかれ、この連関について指摘をしているが、どちらかの論に重点が置かれ両者を同等に扱っているものは少ない。

9. ドイツ人の新しい国民教育は現に存在する  
どのような点に結びつけられねばならない  
か
10. ドイツ国民教育のさらに詳しい規定
11. この教育案は誰の責任で実施されるべきか
12. 主要な目的を達成するまで我々がとるべき  
手段
13. 前回の考察の続き
14. 結び

これを見ただけでも内容が教育問題を中心に扱ったものであることが窺えるであろう。以下順を追いながら教育との関連を中心に重要な箇所を見ていこう。

第1回の講演でフィヒテはまず「ドイツ人全体」を強調する。周知のごとく、当時ドイツはまだ統一されておらず、数多くの領邦に分かれていた。ここで言われている「ドイツ人」とは分裂した諸邦の差異を超え、ドイツ国民として「ドイツ精神」(Deutschheit)<sup>7</sup> という根本特徴を共有するすべての人々のことを指しているのである。「精神的な目を持った人間にまで自分自身を作り上げていくこと、これが自国の独立を失い、それとともに公的な影響力をも失った

国民に残された、確実にして唯一の手段でありましょう。(中略) 従来の教育制度の抜本的改革、これこそ、ドイツ国民を破滅から救う唯一の手段として、私が提案するものであります」<sup>8</sup>。「精神的な目を持った人間」とは「外国製の眼鏡をこっそりかけて、この問題を見たほうが気楽だとする人」<sup>9</sup>ではなく「自分の目で現状を見ようとする人」<sup>10</sup>である。利己心を克服して、道徳的世界秩序の概念を生きたものにまで高めようとするこの教育は、「ある特定の階層の教育ではなく、およそドイツ人であるすべての者に例外なくもたらされなければならない新しい教育」<sup>11</sup>である。つまりフィヒテが目指しているのは単なる庶民教育 (Volkserziehung)<sup>12</sup>ではなく、ドイツ国民教育 (deutsche Nationalerziehung)<sup>13</sup>なのである。

第2回の講演では「新しい教育」の中身について論じられる。

フィヒテは生徒の自由意志を認める態度を従来の教育の誤りだとし、意志の自由を徹底的に否定することから始めなければならないとする。<sup>14</sup> その上で「もはや動揺しない確固とした意志を、確実に例外なく有効な規則にも基づいてもたらす」<sup>15</sup>ことが新しい教育の課題だとす

<sup>7</sup> Fichtes Werke. Hrsg. von Immanuel Hermann Fichte, Bd.VII, Berlin: Walter de Gruyter 1971, S.266. (以下フィヒテの作品からの引用は原則としてこの全集から行い、巻数とページ数のみを示す。)

なおフィヒテの句読点の使用法は当時としても通常のものとは異なっているが、これは講演という形態を意識し、強調したり、息継ぎをしようとしている箇所、本来なら不要な句読点をあえて補っているためと考えられる。

訳はフィヒテ『ドイツ国民教育論』椎名萬吉訳、明治図書、1970年(以下椎名と略記)、ならびにフィヒテ『ドイツ国民に告ぐ』石原達二訳、玉川大学出版部、1999年を参考にした。椎名訳は非常にこなれた訳であるが、惜しむらくは抜粋である。句読点の箇所をどのように解釈するかで、両者の訳に若干の違いが見られる。椎名訳は Johann Gottlieb Fichte: "Reden an die deutsche Nation". Neu hrsg. von F.Medicus, Dritter unveränderter Neudruck, Leipzig: Felix Meiner 1919を底本として用い、石原訳は前記のImmanuel Hermann Fichte編集の全集を底本にしている。不明な箇所はGA, I,10を参照した。

<sup>8</sup> VII, S.274.

<sup>9</sup> VII, S.268.

<sup>10</sup> Ebd.

<sup>11</sup> VII, S.277.

<sup>12</sup> Ebd.

<sup>13</sup> Ebd.

<sup>14</sup> Vgl.VII,S.281.

<sup>15</sup> VII, S.282.

る。その核をなすのは愛であるが、それは「我々の利益のために役立つ愛ではなく、善そのものを目的とする愛」<sup>16</sup>である。これをドイツ人すべての者の心にしっかり植えつけるのがこの教育の目的である。すなわち、道徳的な考え方を育てるのが教育の根幹であると主張する。

それではそのような教育はどのように行われるのであろうか。それにはまず生徒の認識能力を発達させなければならない。しかもその認識とは「事物のあるがままの状態に関する歴史的な認識ではなく、事物を必然的にそのようにさせている法則に関する、より高い哲学的な認識」<sup>17</sup>、つまり「あらゆる経験を真に超越し、超感覚的で、必然的かつ普遍的な認識、それゆえに将来起こりうるであろう経験をすでに予見している認識」<sup>18</sup>なのである。ここには明らかにカントの批判哲学の影響が見て取れる。カントが認識できないものとした物自体 (Ding an sich) をフィヒテは先見的自我の实在の思想によって克服したと言われている。

ここで少し脇道にそれるが、フィヒテの根本思想を理解する上で不可欠な『全知識学の基礎』(Grundlage der gesamten Wissenschaftslehre) (1794年)を見ておこう。これはフィヒテの代表作として知られ、彼自身その後改訂している。哲学の専門家でない者にとっては大変難解な書であるが、『ドイツ国民に告ぐ』の訳者である教育学者椎名萬吉は、同書の「解説」中で次のように簡潔に要点をまとめている。

カント哲学の克服によって到達したフィヒテの立場は、主観的観念論の立場であった。そして、この立場からかれは三つの根本命題をみちびき出した。すなわち、①自我は根源的に自己自身の存在を定立する、②自我は非自我 (Nicht-Ich) を定立する、

③自我は自己とその対立物とを定立する。われわれはこれらの根本命題から存在と意識の関係を、つぎのように理解することができるであろう。すなわち、世界 (存在) は私 (自我) の感得したものであって、その限り非自我 (存在) はわれわれの自我 (意識) によって創造されたものにすぎない。なぜなら、存在がわれわれに作用するということは、われわれがわれわれに作用する存在を思惟 (意識) することにほかならないからである。したがって、フィヒテにおいては、外界の事物、および現象はすべて、専ら、われわれの意識の創造したものであるということになる。(中略) フィヒテの教育思想を理解するにあたって、まずここで知っておかなければならない重要なことは、フィヒテの直観の概念は意識と独立に存在する外界との関係で成立しているのではなく、専ら自己の感覚による自覚的理解と関係しているということである。

フィヒテのこのような認識論的思考は、なるほど今日の科学的思考とは異質のものにちがいない。しかし、われわれは、この非科学的な思考、学説のなかに含まれている積極的な側面に注目しなければならないであろう。それは何か。それは、人間のあり方の改善と改造にむけられたフィヒテの倫理的側面である。この点、自我がその世界を創造 (定立) するということは、自我そのものがこの創造の過程においてのみ实在するものとして証明されていることを意味していたのである。なぜなら、フィヒテにあっては、かの先験的自我の存在は決して所与の事実ではなく、自由な活動の所産であるからである。<sup>19</sup>

<sup>16</sup> VII, S.284.

<sup>17</sup> VII, S.286.

<sup>18</sup> VII, S.288.

<sup>19</sup> 椎名、209頁以下。

ここから行動する哲学者フィヒテが生まれてくるのである。

話を戻そう。自身が優れた教師でもあったフィヒテは次のような具体例を示し「新しい教育」の目指すところについて分かりやすく説明している。

従来の教育は通例、事実のあるがままの状態をただ信じ、ただおぼえこむことを目的とただけで、その理由などはどうでもよかったのです。つまり、もっぱら事物中心の暗記力による、単なる受動的な理解だけを目的としていたのです。(中略) 記憶というものは、それが他の精神的な目的のために役立つのではなく、それ自身が自己目的化してしまった場合は、人間にとっては精神的活動というより、むしろ苦痛を意味します。<sup>20</sup>

それゆえ学んだことを実践を通じて訓練していくことが肝要なのである。だが、それとてフィヒテにとっては副次的なことではない。さらに重要なのは、「愛の力で生徒の自我が高められ、生徒自身、思慮と規則に基づき、神の恩恵を受けたほんの少数の者だけが偶然に知りえた、事物の新しい秩序をはっきり自覚するようになること」<sup>21</sup>なのである。

この目的を実現するためには、自らが正しい理想像を有している教師が必要なのは言うまでもないが、さらに生徒たちを一般社会から隔絶することが必要とされる。「理想にまで高められた秩序愛をもとに個人と全体との関係を生徒自身に納得させること」<sup>22</sup>は、利己的で善悪を転倒させている一般社会から隔離された共同体

での生活の中でのみ学び取られるからである。これは後に述べる大学論のなかでも繰り返し登場するフィヒテの教育に関する根本理念の一つである。

第3回の講演ではフィヒテの時代認識が明らかにされる。

人類が自分自身で自分自身をつくりあげていくこと、しかも、一般的にいつて、分別と規則に基づいてこれを行うことは、いつかどこかで始められなければなりません。そうすれば自由のないままに発展してきたこれまでの時代に代わって、自由と分別を持って人類が発展していく次の時代がやってくるでしょう。時期について言えば、今こそその時であり、人類が現実生活の真只中でその転換期に直面しているというのが、我々の意見です。また場所について言えば、他の国民の先駆となり模範となつてこの新しい時代を切り拓いていくという使命は、誰よりもまずドイツ人に課せられていると我々は信じています。<sup>23</sup>

我々というのはフィヒテと聴衆、そしてこの問題に関心を持つすべてのドイツ人であろう。まさに『ドイツ国民に告ぐ』というタイトルそのものの、繰り返し引用される有名な箇所である。そこにはもちろん戦争に敗れたドイツ人を鼓舞しようという意図があるが、それは単なるアジェンションではなく、明確な歴史観に基づくものである。

フィヒテ自身が『ドイツ国民に告ぐ』の前書きの中で、この講演はその続編であると断っている、1804年から1805年にかけて行われた講演

<sup>20</sup> VII, S.288f.

<sup>21</sup> VII, S.290f.

<sup>22</sup> VII, S.293.

<sup>23</sup> VII, S.306.

『現代の根本特徴』（Die Grundzüge des gegenwärtigen Zeitalters）で、彼は人類の歴史の発展を5段階に分けて捉えていた。すなわち次のようである。

- （1）本能によって理性が無条件に支配する時期。人類の無垢の状態。
- （2）理性本能が外的に強制する権威へと変貌する時期。究極根拠にまでは遡及せず、したがって確信できず、かといってその一方では強制されることを望み、盲目的な信仰と無条件的な忠誠を求める積極的な教説体系と生活体系の時代。罪が芽生える状態。
- （3）直接的には命令的な権威からの、間接的には理性本能と個々の形態をとる理性一般の支配からの、解放の時期。あらゆる真理にたいする絶対的な無関心と、何の手がかりもない完全に非拘束の時代。完全に墮罪の状態。
- （4）理性知識の時期。真理が最高のものとして認められ、最も愛好される時代。義認が始まる状態。
- （5）理性技術の時期。人類が確実に誤りのない手で自分自身を理性の適切な模写とする時代。完全な義認と浄化の状態。<sup>24</sup>

『現代の根本特徴』では「現代」は第3期に当たるが、『ドイツ国民に告ぐ』では第4期への転換期に当たるとされる。この違いに着目し、福吉勝男は次のように考察する。

この現代の位置づけの違いは何を意味するのだろうか。フィヒテは何故、これほど意識的に1807年を画期点にしたのだろうか。それは、現代そのものの歴史的進展としか考えられないのである。その歴史的進展とは、1807年の「ティルジットの和議」における、ナポレオンによるドイツ支配体制の

確立ということである。ナポレオン—フランスによるドイツ支配の貫徹が明確な事実になったが故に、かえってドイツ国民・民族（Nation）から見れば、解放と統一の課題が鮮明になったと言える。ここに、人類史の第4期—「理性およびその法則が明瞭な意識をもって理解される時期」、すなわち「是正の芽生えの状態」が到来した、とフィヒテは確信したわけである。フィヒテによる「現代」のこうした位置づけにおける違いのところに、わずかに2～3年の間の大きな時代の進展と、それを鮮明に自覚したフィヒテの時代・歴史認識の鋭さをみてとることができる。<sup>25</sup>

しかしこのような転換は一朝一夕に行われるものでない。そのためには最初に力説されたように、利己心を克服して道徳的世界秩序の概念を生きたものにまで高めようとする新しい教育の導入が必要とされるのである。

新しい教育の第一の前提としてフィヒテは次のように述べる。

人間の根底には、善に対する純粋な快の感情があり、この快の感情が十分に発達すると、人間は善と認められたことをしないで、悪と認められたことだけをするといったことは絶対にできなくなります。これに反して、従来の教育は、人間には神の掟に背く性質が生まれながらにあるとか、神の掟を実行するのはそもそも不可能だとか決めかかっていただけでなく、それを子供の頃から教え込んでいたのです。もしこのような教えが真面目に受け取られ、信じられていたとしたらどうなるのでしょうか。その場合、生徒は誰でも、自分の本性は決して変えられないと信じ込み、いったん不可能だと思い込んだことに対しては、二度とし

<sup>24</sup> VII, S. 11f. 訳は『現代の根本特徴』柴田隆行訳、『フィヒテ全集 第15巻』、哲書房、2005年、19頁によった。

<sup>25</sup> 福吉、102頁以下。

てみようとは思わないでしょう。生徒は誰もが、自分自身や他のすべての者がおかれている現状以上に向上を欲することもなくなるでしょう。そればかりか、生徒は誰でも、思い込まれたとおり、自分の恥ずべき状態に甘んじ、自分が生来罪深い人間であり、卑劣な人間であることを認めてしまうでしょう。なぜなら、神の前で自分自身が恥ずべき人間であることを認めることが、神と妥協する唯一の手段であると考えようになるからです。<sup>26</sup>

ここで彼はいわば一種の性善説に立っている。「子供を導く」という意味のギリシャ語起源の外来語、“Pädagogik”とは違い、「教育」にあたるドイツ語の“Erziehung”には本来「(人間の中にあるものを)引き出す」という意味があるが、人間の中にもともと善なるものがなければ、そもそもそれを引き出すことなどできないであろう。この考えは、一見すると先に述べた意志の自由を徹底的に否定するという考えと矛盾するように見える。しかしフィヒテは、生徒はまだ善悪の判断の規準が定まっていないため、有害な社会の影響を受けるとその生来の善に対する感情を十分発達させることができないので、教育によってその規準を教えなければならないと主張しているのであり、人間は生まれながらにして悪であると決めつけているのではない。生徒たちを一般社会から隔絶することの必要性もそこから生じるのである。

後半の部分は、読みようによっては原罪を基礎におくキリスト教に基づいた宗教教育の否定とも受け取れる。フィヒテは1798年に「神的世界支配に対する我々の信仰の根拠について」(Ueber den Grund unseres Glaubens an eine göttliche Weltregierung)を発表した。この論文でフィヒテは宗教が本質的に道徳的行為と結び

ついていること、そしてこの道徳的行為は神が統治していることに対する我々の信仰と結びついていることを主張した。この場合の信仰とは、感性界の根底に、それを超え、そして規定する「道徳的世界秩序」がある、ということに対する信仰である。そして、この道徳的世界秩序こそ「神」と呼ばれるものに他ならないとする。彼は、神をこの道徳的世界秩序から切り離して、ある特殊な実体と考えることは不可能だとした。と同時に、道徳的世界秩序としての神に対する信仰を我々が捨てることは、道徳的行為をめざす限り、けっして許されないとした。

この論文は「無神論」と誹謗され、この論文を掲載した『哲学雑誌』(Philosophisches Journal)はドレスデンの宗教局に没収された。フィヒテが神を実体として考えることができないとしている点に、無神論者とされた理由があったようである。フィヒテはこれを学問の自由に対する重大な冒瀆として懸命に弁明を試みたが、かえって火に油を注ぐ形になり、結局イェナ大学を辞職することとなった。これがフィヒテがベルリンに赴くきっかけとなったのである。<sup>27</sup> カントが『単なる理性の限界内の宗教』(Die Religion innerhalb der Grenzen der bloßen Vernunft)(1793年)によって、宗教に関する講義や著作を禁じられたことを思い起こさせる事件であるが、プロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム2世(在位1786年—97年)が治めたカントの時代と違い、その後を襲ったフリードリヒ・ヴィルヘルム3世(在位1797年—1840年)が思想的に寛大だったのは幸いであった。

第4回から第8回までの講演ではドイツ民族およびその特性の解明が主要なテーマとなる。

まず、第4回では言語の問題が取り上げられる。フィヒテは、ドイツ人が民族の最初の言語を持続けたのに対し、その他のゲルマン系諸

<sup>26</sup> VII, 307f.

<sup>27</sup> 福吉、56頁参照。なお福吉は、これ以外にフィヒテの言動に対する反感や嫉妬があり、こちらが主な原因ではなかったかと述べている。



民族が外国語を取り入れたのが、民族大移動による居住地の変化以上に重要なことだと述べ、その理由として「人間というものは、言語を作ることより、言語によって作られるという場合のほうがはるかに多い」<sup>28</sup>ことをあげている。感情や思考をつかさどるのは言語であり、両者は分かちがたく結びついているという点では「血につながるふるさと、心につながるふるさと、言葉につながるふるさと」(島崎藤村)<sup>29</sup>を思わせるものがある<sup>30</sup>。だが、フィヒテはそこにとどまらず、さらに踏み込んで「生きた言語を持った民族」(＝ドイツ人)と「死んだ言語を持った民族」(＝他のゲルマン系の民族)を区別し、次のように結論づける。「生きた言語を持った民族は、あらゆることにおいて実に勤勉かつ真剣であるばかりでなく、つねに努力家であるが、反対に、死んだ言語を持った民族は、彼らの幸運な自然の本性に任せて努力しようとししない」<sup>31</sup>。それゆえ、「生きた言語を持った国民は、偉大な国民大衆として陶冶される可能性を持っている。したがって、このような国民の教育にあたる人々は、そのために、自分たちの発見した教育方法を国民に試行し、国民を教育しようとしている。これに対し、死んだ言語を持った国民においては、教養ある階層は、国民大衆から逃避し、国民大衆を自分たちの計画を遂行するための単なる道具以上のもの

のとは考えていない」<sup>32</sup>のである。

フィヒテの真意はもちろん、身分や階層の違いを越えて新しい国民教育を目指そうということであるが、このような箇所を字面だけ読むと、優秀な国民はドイツ人だけで、他の国民は教育するに値しないという、尊大な態度と受け取れないことはない。このような、曲解すれば国粹的とも受け取られかねない言説は、後にフィヒテを悪用する者たちに格好の材料を提供したことは想像に難くない。<sup>33</sup>だが、このような人々はフィヒテが第7回の講演で次のように言っているのを看過しているに違いない。

創造的で新しいものを産み出しながら自ら生きる人々、あるいはこうした生にはあずかれなくとも、少なくとも無価値なものを断固として捨て去り、どこかで根源的生命の流れが自分をとらえるかどうかに注意を払っている人々、あるいはそこまでいかにしても、少なくとも自由を予感し、自由を憎んだり恐れたりせずに愛する人々――すべてこのような人々は根源的人間であり、民族として観られるならば原民族(Urvolk)、民族そのものであり、ドイツ人であります。<sup>34</sup>(中略)精神性とこの精神の自由を信じ、この精神性の自由による無限の形成を欲する者は、どこで生まれ、どんな国語を

<sup>28</sup> VII, S.314.

<sup>29</sup> この言葉は故郷馬籠の小学校での講演の中で、藤村が即興で語ったの聴いていた小学校の教員が書きとめたものであり、そのため全集には収められてはいない。

<sup>30</sup> 「言語と民族」というテーマで誰もが思い浮かべるのは、アルフォンス・ドーデの『最後の授業』であろう。普仏戦争に敗れたフランスのアルザス地方の村で、明日からもうフランス語の授業ができなくなるという事件を扱ったこの作品は、日本の小学校教科書にも採用され、フランス人でなくとも愛国心を鼓舞されるものであるが、実はこの地方本来の言語はドイツ語の方言であったことは意外と知られていない。

<sup>31</sup> VII, S.327.

<sup>32</sup> Ebd.

<sup>33</sup> これについてヘルムート・ザイデル(1929年生)は、自身の学校時代の経験に基づき『ドイツ国民に告ぐ』がナチの教育のコンセプトに転用されたことを述懐している。

Vgl. Helmut Seidel: Johann Gottlieb Fichte zur Einführung. Hamburg: Junius, 1997, S.139.

<sup>34</sup> ドイツ人が自らを原民族であると呼ぶ権利がある理由としてフィヒテは、「ドイツ」(deutsch)という語が本来「民族の」という意味を持っていたということをあげているが、これは語源的に観て正しいと認められている説である。すなわち「ゲルマン」(germanisch)という語が、ローマ帝国の人々がこの民族に対して外部から与えた名称であるのに対し、彼らは自分たちを「ドイツ」人と呼んだのである。Vgl. VII, S.359.



話そうとも、我々の種族であり、我々に属しており、我々に加わることでしょう。<sup>35</sup>

この言葉は、「自由を愛する人々は、どこに住んでいようとベルリン市民だ。その意味で私もベルリン人だ」という、東西冷戦の時代、ベルリン封鎖が行われている最中にベルリンを訪れたケネディが市民の前で行った演説を思い起こさせる。フィヒテにとっては国籍や言語以上に自由を愛する態度が重要なのである。「フィヒテの愛国心（Nationalismus）は国を越えた（übernational）理性の目標に取って代わることはない」<sup>36</sup> というロースの指摘は正当であり、この講演がなされた当時の時代背景やフィヒテの根本思想の理解を抜きにして、このような言葉だけを取り上げて一人歩きさせ、フィヒテを偏狭な愛国者と評価するのはやはり一面的な誤った解釈といえるであろう。

第6回の講演では国家と教育の問題に言及し、さらに哲学との関連についても指摘する。

理性的国家というものは、現にある材料をかき集め、人工的に細工することによって作られるものではありません。国民がそのようなものへとまず育成され、引き上げられなければならないのです。完全な人間を教育するという課題を、実際に最初に解決した国民のみが、その後で完全な国家という課題も解決するでしょう。（中略）永遠の時の流れの中で、目下日常的に見られる傾向は、国民を人間へと完全に教育することです。このことなしには、哲学のいかなる成果も広範な理解を得ることは不会でしようし、ましてや生活において広く応用され

ることもないでしょう。逆にまた、哲学なしでは教育技術はけっしてそれ自体完全な明瞭性に到達することができないでしょう。このように両者は絡み合っているのであり、一方は他方なしでは不完全で役に立ちません。<sup>37</sup>

先に見たとおり知識学がこのフィヒテの考えの根底にあり、教育はその実践のひとつである。この理念が哲学部を主体とした彼の大学構想の根底にもあると思われる。

第7回の講演では古代ギリシャとドイツの政治を比較し、「ドイツの政治は教育にあたって、外国のように最頂点の君主に向かうのではなく、もっと広い分野の国民に向かう。なにしろ君主にしても国民の一人であることには違いないのだから」<sup>38</sup> と主張する。ここにはルソーとフランス革命の影響を受けたフィヒテの若き日の思想が、今なお脈打っているのが見て取れる。

国民教育という観点から、第9回の講演では具体的な教育に言及し、ペスタロッチの教育方法が推奨される。フィヒテはすでに1793年にペスタロッチと会い、教育問題について論じ合っている。「ドイツ国民に告ぐ」の講演を行う半年前頃には彼の著作を集中的に研究しており、1807年6月3日付けの妻に宛てた手紙の中で、彼の本を薦めるとともに、こう述べている。

目下この人の教育体系を研究していますが、ここには現在の病的な人類を救うための真の方法が見出せます。それは同時に人類に知識学を理解させるのに役立つ唯一の手段でもあります。<sup>39</sup>

<sup>35</sup> VII, S.374f.

<sup>36</sup> Peter Rohs: Johann Gottlieb Fichte, München: C.H.Beck, 2007, S.150.

<sup>37</sup> VII, S.353f.

<sup>38</sup> VII, S.366.

<sup>39</sup> GA, III, 6, S.121.

講演では、ペスタロッチの根底にあったものはドイツ的特性の一つ「寄る辺のない貧しい庶民への愛」<sup>40</sup>であったことが確認される。ペスタロッチのはじめの願いは、ただ大衆を助けたいということだけであったが、結果として、民衆を向上させ、庶民と教養ある階層の一切の垣根を取り除き、自身が求めていた民衆のための教育（Volkserziehung）の代わりに、国民教育（Nationalerziehung）をもたらしたのである。<sup>41</sup> フィヒテはペスタロッチの直観教授を評価して次のように述べる。

生徒をじかに直観の世界に導き入れよ、  
という方法は、我々が提案している方法、  
すなわち、生徒の精神的活動を刺激して、  
いろいろな表象を自由に描き出させ、生徒  
が学習するいっさいのものを、この表象の  
自由な働きを通して習得させよ、という方  
法と同じ意味のものであります。<sup>42</sup>

だが一方、ペスタロッチの犯した「誤り」も指摘する。

ペスタロッチの教育方法では、文字の読み書きが過大に重んじられ、この二つが民衆教育のほとんど最高の目標として掲げられています。（中略）あいまいな直観から明瞭な概念へと人類を引き上げるための一つの手段は言語であるという、言語に対する明らかに誤った見解が認められます。<sup>43</sup>

これはどういうことだろうか。第4回の講演では自ら「人間というものは、言語を作るとい

うことよりも、言語によって作られるという場合のほうがはるかに多い」<sup>44</sup> と言っていたのではないか。そしてまたヘレン・ケラーも「言語を理解したとき私ははじめて人間になった」という趣旨のことを言っているのではないか。

まず考えなければならないのは、言語教育を行う以前に直観教育を充分に行わなければならないということであろう。さらに、言語（Sprache）と読み書き（Lesen und Schreiben）という二つを分けて考える必要があろう。フィヒテが主に批判しているのは後者だからである。

彼はペスタロッチが「温かな愛の心から、貧しい子供たちを一日でも早く学業から解放し、職に就かせてあげたい、しかもその中途半端な教育を、職に就いてからでも、取り戻す手段だけは与えてあげたい」<sup>45</sup> と考え、そのために文字の学習を重んじているのは十分理解している。だが文字（Buchstabe）の学習は、「直観の世界に生徒をじかに導き入れる代わりに、単なる記号だけを覚え込ませ、生徒の注意力を集中させる代わりに、彼らを放心状態に陥らせてしまうという危険を伴っている。直観というものは、その場で把握しなければ何も把握できないが、それには集中力が必要である。筆記しておけばこれで安心と考え、生徒はまたの機会にこの筆記をもとに勉強するつもりであるが、そのような機会はおそらくけっして来ないのである。また文字の学習は、これまでも見られたように、一般に文字だけを相手にしている場合しばしば起こりがちな観念の遊戯に、生徒をおとし入れる危険性を持っている」<sup>46</sup>。であるからフィヒテは「直観の完成が文字（Wortzeichen）の知識に先行しなければならないと確信している。反

<sup>40</sup> VII, S.402.

<sup>41</sup> Vgl.VII, S.403.

<sup>42</sup> VII, S.403f.

<sup>43</sup> VII, S.404f.

<sup>44</sup> VII, S.314.

<sup>45</sup> VII, S.404.

<sup>46</sup> VII, S.405f.

対の経路をたどると、その結果はあいまいな影と霧の世界にたどりつき、口先だけが達者な人間を作り上げてしまうことになるが、まさにこれこそペスタロッツが当然のことながら嫌っていたことなのである」。<sup>47</sup>「人間を教育し、あいまいと混乱の状態から、はっきりした状態と確固とした状態へと人間を高めてくれるのは、言語記号(Sprachzeichen)ではなく、話すことそれ自体 (das Reden selbst) と、自分の考えを他の人々に伝えようとする欲求」<sup>48</sup>なのである。

これは、まさに我々がともすれば陥りがちな過ちに対する鋭い指摘であり、ここにもフィヒテの長年の教師としての経験と教師としての優れた資質を見ることができる。

だが、そもそも文字の学習云々以前に、フィヒテにとってはできるだけ早く教育を終わらせようという考え方自体が誤りなのである。

いつの日か、この新しい教育を実現させようとするのなら、なるべく早く教育を終わらせ、生徒たちをなるべく早く職に就かせたい、などという惨めな考え方は、この際、絶対になくさなければなりませんし、いやしくも教育の問題を論ずる場合、かりそめにも口にしてはならないものであります。このような国民教育はけっして莫大な費用のかかるものではないように思われます。<sup>49</sup>

行動する哲学者フィヒテの面目躍如たる胸のすくような正論である。フィヒテの講演にはバイメの他に現職の国務大臣フォン・シュレッター、後の文部大臣アルテンシュタインなどのベルリンの有力政治家が集まったと言われているが<sup>50</sup>、

現代の政治家たちにも是非一読してもらいたい箇所である。

第10回の講演では公民教育と宗教教育の重要性が述べられる。その基を形作るのは、認識する対象に対する愛と、人と人とを結び付ける愛である。この教育を行う際注意すべき点は、男女ともに、同じ教育を、同じ方法で受けるということである。

男子と女子をそれぞれ別個の学校に入れて別々の教育を行うことは、教育の目的に反しますし、完全な人間を作り上げるための教育上欠くことのできない多くの重要な部分を無意味なものとしてしまうでしょう。(中略) 男女の生徒が人間となるための教育を受けるこの小さな社会は、やがてこれらの生徒が一人前の人間となって足を踏み入れるべき大きな社会と同様、男女両性の協力によって成り立っていなければなりません。男子と女子は性の相違を意識し、夫となり妻となる前に、まず互いに相手をよく知り、互いに共通な人間であることを認め合い愛し合うことを知って、互いによき友人とならなければなりません。<sup>51</sup>

当時まだ支配的であった女性には学問は不要といった見解に対し、フィヒテの考えがいかにか革新的なものであったか分かるであろう。

それとともに強調されるのは、学習 (Lernen) と労働 (Arbeiten) の統一である。労働が重要視されるのは、一般的な国民教育のみを受けて社会に送りだされる人々は勤労者階級に属するからであるが、それ以上に大切な理由は「人間

<sup>47</sup> VII, S.409.

<sup>48</sup> VII, S.408.

<sup>49</sup> VII, S.405.

<sup>50</sup> Vgl. Helmut Schelsky : Einsamkeit und Freiheit. Idee und Gestalt der deutschen Universität und ihrer Reformen. Reinbek: Rowohlt 1963, S.51.ヘルムート・シェルスキー『大学の孤独と自由』田中昭徳、阿部謹也、中川勇治訳、未来社、1970年、57頁参照。

<sup>51</sup> VII, S.422.

というものはいつも自分自身の力で自分自身の道を切り開いていくことができる、したがって、自分自身が生きていくためには他人の恵みをけっして必要としないという、確固たる信念を持つことは、人間が一個の独立した人間になるためには欠かすことのできないものであるばかりでなく、それはまた、これまでおよそ人々が信じてきたよりもはるかに決定的に、人間の道徳的独立心の基礎になっている」<sup>52</sup> ということである。これを彼は経済教育（wirtschaftliche Erziehung）と呼んでいるが、これは、幼い頃家の手伝いで鶯鳥番をしていたフィヒテ自身の経験から出た言葉であろう。すなわち、労働することを学び、労働をいとわない者だけがおもねたり追従したりすることなく、「名誉を受けながら生活することができる」<sup>53</sup> のである。

この上に来るのが学者教育（Gelehrtenziehung）である。ここでフィヒテが「学者」（Gelehrte）と呼ぶものの中には、狭い意味での学者、すなわち研究者だけでなく、いわゆる官僚など国家の中枢を担うエリートたちが含まれていることに注意しなければならない。学者教育を受けるのは選ばれた男子のみである。<sup>54</sup> だが出身階層の違いによる差別はない。才能を持った人間は国民全体の貴重な財産だからである。学者になる者もまず国民教育を受けなければならないが、特に要求されるのは「他人の指導を一切必要としない精神的独立と孤独な思索」<sup>55</sup> である。これについては稿を改め、彼の大学論で詳しく考察する。

第11回では教育を国家の手で行う必要性が述べられる。フィヒテが言うように、元来教育は国家ではなく教会の手によって行われていたのであるが、そこでは言うまでもなく神学が中心となっていた。だから大学でもその他の学部は神学部の付属的な機関に過ぎなかったのである。教会が来世での浄福を願うのに対し、国家は地上での幸福を実現させなければならない。そのためには国民教育を行うことが必要なのである。

これまで見てきたようにフィヒテの言う国民教育とは現代の義務教育と考えていいと思われるが、この費用を国家が負担できるかという問題がある。これについて彼は次のように述べる。

国民教育の経費を支出することこそ他のほとんど大部分の経費の支出を経済的に解決する唯一の方法であり、したがって、この経費を引き受けさえすれば、遠からず、国家にとって他に重大な支出はなくなるであろうという確信を、国家に持たせることが必要でしょう。これまで、国家収入の大部分は常備軍の維持に充てられてきました。この出費の結果がどういうことになったかは、すでに見てきました。これでもう十分でしょう。<sup>56</sup>

フィヒテの考える国民教育では体育も重要な位置を占めており、愛国心とともに屈強な体を持った国民を作ることが国防にも役立つと考えられていた。

<sup>52</sup> VII, S.423.

<sup>53</sup> VII, S.424.

<sup>54</sup> ここで女子を差別しているのではないかという意見もあるが、それは現代の視点から見た批判で、むしろ国民教育を男女ともに受けるべきとした彼の先見の明を評価すべきであろう。ちなみにフィヒテがベルリンの主だった2つの新聞に掲載したこの講演の広告でも、わざわざ「両性が混在した聴衆のために」と断り書きを入れている。GA, I, 9, S.289.

椎名は、フィヒテと対比させ、「女子の教育は知識の習得によってよりは、生活を通して行われる方が一層望ましい。女子というものは高等の学問のためにつくられているのではない」というヘーゲルの言葉を引用している。

椎名、215頁。

<sup>55</sup> VII, S.427.

<sup>56</sup> VII, S.431.

われわれの提案する国民教育があまねく実施されるなら、次の若い世代がこの教育を終了するやいなや、国家はこれまで見たこともないような見事な軍隊を持つことになるでしょう。なぜならどの青年も、我々の新しい教育により、自分の体力をあらゆる目的に使えるよう完全に訓練されており、機に臨んで即座に力を発揮することができ、いかなる緊張や苦勞にもへこたれることがないからです。また彼らの精神は直接的な直観教育によって陶冶されているので、常に沈着で、自覚を忘れることもありません。その心には自分が属している全体、すなわち国家や祖国に対する愛が息づいており、利己的な衝動はすべて捨て去られているのです。<sup>57</sup>

椎名は、フィヒテが「当時の他の国民教育思想家—ヤーン、フリーゼン、ハルニッシュ、フレーベル、アッカーマン—と同様に、体育を通して『解放戦争』への準備を意図していた」<sup>58</sup>と述べているが、おそらくそのとおりであろう。

筆者はこの箇所を読み、数年前スイスで行われた徴兵制に対する国民投票を思い出した。結果は51%対49%という僅差で徴兵制が存続することになった。冷戦終結後の今日、スイスが軍事的な脅威にさらされる危険性は極めて少ないと思われるが、そこには独立を守ろうとするスイスの長い歴史がある。ヒトラーはオーストリアを併合した後、スイスへの進出も目論んだが、最後には平地を捨て山の中に籠もっても戦い続けようという将軍の言葉に共感したスイス国民の前に、多くの犠牲を払ってまで戦うのは割が合わないと判断し、諦めたのであった。

この回ではさらに、大学を卒業した者たちが

公務に就くまでの間、国民教育を行う学校で自ら教壇に立つことが望ましいとされている。教育実習や医師のインターン制度を先取りした形であるが、これは生徒に良い影響を与えるのみでなく、大学を卒業した者たちにも、天真爛漫な生徒と接することにより、大学では得られない「真の人間智と称するに足る宝物」<sup>59</sup>を得る機会を与えるのである。

このようにペスタロッチの学校で養成された教師を中心に多くの青年たちが集まって教育することにより、財政上もかなり軽減されるとフィヒテは考える。そしてこの教育を実現しようとする「善き意志」<sup>60</sup>さえあれば、「克服できない困難はない」<sup>61</sup>と結ぶ。

第12回以降の講演はこれまで述べてきたことの総括であり、目新しいことは述べられていない。<sup>62</sup> まずフィヒテは次のように聴衆に呼びかけて、講演全体のテーマを確認する。

この講演はまず聴衆であるあなた方に訴えました。さらに印刷物を通じて、人々を結集し、固い決意のもとに次の問題について意見が一致するようにさせるならば、その限りで全ドイツ国民に訴えることになりましょう。すなわち（1）ドイツ国民というものが存在するということ、そしてその固有の民族性と独立とが今危機に瀕しているというのは本当か。（2）この国民を滅亡させないために尽力する価値があるか。（3）滅亡させないための確実に有効な手段というものがあるか、またその手段とはどんなものか、という問題です。<sup>63</sup>

今まで見てきたように、フィヒテは教育こそ

<sup>57</sup> Ebd.

<sup>58</sup> 椎名、216頁。

<sup>59</sup> VII, S.441.

<sup>60</sup> VII, S.444.

<sup>61</sup> Ebd.

<sup>62</sup> 椎名訳でも第5回から7回までと第12回以降は割愛されている。

<sup>63</sup> VII, S.448.

がその手段であり、それ以外はないと確信していた。そして従来の教育に対し、ペスタロッチの原則にしたがった新たな教育計画を構想したのである。

結びにあたる第14回の講演ではフィヒテは聴衆をはじめ、すべての階層の人々に呼びかける。まず青年、そして老人、次に実務家、さらに思想家、学者、著述家、そしてドイツの諸侯、最後に全ドイツ国民に対してである。ドイツ民族の祖先の口を借りるという形で彼は次のように語る。

事態がこのようになった今、お前たちは肉体的な武器で彼らに打ち勝つべきではない。ただお前たちの精神を彼らに向かって毅然と高く保つべきである。お前たちには精神と理性の王国を建設し、世界支配を目指す粗野な肉体的暴力をすべて絶滅させるという、より偉大な使命が与えられているのである。そしてそれを成し遂げれば、お前たちは我々の子孫の名に値する。<sup>64</sup>

それぞれの人がそれぞれの立場でこの王国の建設に邁進することを訴え、この連続講演は幕を閉じる。

## おわりに

フィヒテが野外に集まった人々に向かって身を乗り出し、右手を振り上げながら熱弁をふるう様子を描いた一枚の絵がある。そこにはまさにあらゆる階層の人が集っており、ある者は草の上に座り、ある者は木の下に立ち、フィヒテの演説に聴き入っている。言うまでもなく、『ドイツ国民に告ぐ』の様子を描いたものである。この講演は、実際にはベルリンの学術アカデミーで行われたので、この絵はまったくの創作なのであるが、それがあたかも実際にあったことだったかのように思わせるエネルギーがこの講演には満ちている。フィヒテの願いもまさしくそこにあった。

現代のドイツではいたる所に民衆大学（Volkshochschule）が見られる。外国語や趣味などの教養科目を主として教える、学歴に関係なく、誰もが安い授業料で受講できる、公立の学校である。いわば公民館が行う文化活動のようなものであるが、それがきちんと組織立って恒常的に行われているところに特徴がある。これはフィヒテの国民教育思想の影響を受けているということである。その他統一学校（Einheitsschule）や作業学校（Arbeitsschule）などの教育運動の中にもフィヒテの影響が見られるということである。<sup>65</sup> このように彼の国民教育の理想は、根本においては200年以上経った今日でもけっして色あせてはいない。

『ドイツ国民に告ぐ』の中でフィヒテは何度もルターに言及しているが、ルターが翻訳した聖書がすべての家庭で読まれ、今日のドイツ文章語の基礎を作ったように、フィヒテのこの講演も、彼が願ったとおりドイツ国民教育の基礎を形作ったのである。

<sup>64</sup> VII, S.496.

<sup>65</sup> 椎名、221頁参照。